

日韓文化交流基金 NEWS



No. 80 2016.12.26

contents

- 1-3 青少年交流事業
日韓交流おまつり開催
おまつり in Seoul 大学生訪韓団による日本の昔遊び紹介
おまつり in Tokyo 高句麗衣装試着体験を中心とした展示
- 4 基金賞
第17回日韓文化交流基金賞 俳人・金泰定氏などに授与
- 5 韓国訪問団
当基金役員による代表訪問団が韓国を訪問
- 6-7 フェロー研究紹介
メディアアートに関する断想
多摩美術大学SPS外国人特別研究員 馬定延
- 8-9 青少年交流事業
日中韓ユースサミット開催 日韓参加者へのインタビュー
- 10-12 日韓文化交流基金事業報告
2016年度第2四半期実施事業紹介
沙也可をきっかけに日韓交流
新任のご挨拶
日韓文化交流基金 業務執行理事 春木育美

「日韓交流おまつり」が開催

おまつりを通して、東京、ソウルで日韓交流

9月24、25日、東京・日比谷公園を会場に8回目となる日韓交流おまつり in Tokyo (以下、おまつり in Tokyo)、10月2日はソウル・COEXを会場に12回目となる日韓交流おまつり in Seoul (以下、おまつり in Seoul) がそれぞれ「共に創ろう新たな50年」をテーマに開催されました。

おまつり in Tokyo では、昨年に引き続き、一般社団法人高麗1300、高麗神社の協力のもと、日韓文化交流基金の展示ブースを設けました。

また、おまつり in Seoul では、日本大学生訪韓団ブースが設けられ、大学生訪韓団として派遣された日本の大学生たちが準備した日本の伝統遊びなどの紹介が行われました。いずれのおまつりでも、来場者も多く、盛況のうちに終えることができました。

今号では、ソウル、東京でそれぞれ行われた交流の様子について紹介します。



日韓交流おまつり in Tokyo にて李俊揆 (イ・ジュンギョ) 駐日大使夫妻のご案内で高円宮妃久子様が当基金ブースにお立ち寄りになられ、高句麗衣装を身にまとった韓国青年たちと一緒に記念撮影にも応じてくださいました。

おまつりin Seoul 折り紙やけん玉など日本の昔遊びを紹介

10月2日(日)ソウル・COEXを会場に行われたおまつりin Seoulには、おまつりの開催にあわせて派遣された日本大学生訪韓団による展示ブースが設けられ、この日のために自ら準備した、折り紙やけん玉といった日本の昔遊びを訪れた方々に紹介しました。今年のおまつりin Seoulには、6万人(主催者発表による)が訪れ、多くの来場者が展示ブースで昔遊びを体験したり、訪韓団に参加した学生たちとの交流を楽しんでいました。

今号では、大学生訪韓団の団員として、訪韓プログラムに参加し、おまつりin Seoulの展示ブース運営でも活躍した学生の感想を紹介します。



けん玉などを手に日韓のスタッフが一緒に

彼らと一緒にインスタントカメラで写真を撮った時に、写真の余白に「日本好きです」とメッセージを書いてもらったのが印象に残っている出来事です。

両国のこれからを築いていく私たちの世代が、実際に行って、見て、触れることが大切だと身をもって感じました。そのためにも自分自身で感じた「韓国」を言葉にして伝えていきたいと思います。



浴衣姿のスタッフが来場者に折り方を丁寧に説明

「日韓交流おまつりinソウルでのブース運営を通して感じたこと」

山梨県立大学国際政策学部
国際コミュニケーション学科
椎名紋世(しいな あやせ)さん



大学生訪韓団に参加したのは、韓国に住む同世代の若者の考えや意見に興味があり、日常生活や日韓関係に対する意見などを知りたいという動機からです。

今回、日程中におまつりin Seoulで、展示ブースを運営することが組まれており、韓国の人たちに日本への興味・関心を持ってもらえるような展示をして、交流したいと思っていました。私たちのブースでは、けん玉やダルマおとし、福笑い、紙相撲などを用意して、日本の昔遊びを紹介する展示を行いました。来場して下さった方々は、昔遊びの道具を見て、「これは何?」と興味を示してくれたり、楽しそうに遊びを体験している姿をみて、とても嬉しかったです。反省点としては遊び方は身振りや実演でどうにか伝えることができましたが、もう少し自分の言葉でも伝えられるように出来れば良かったと思いました。言葉によってやり取りすることの重要性を改めて感じる貴重な経験になりました。

来場者の中には、日本語を勉強している学生も多くいて、とても日本語が上手なことにも大変驚きました。日本語を勉強し始めた理由や日本のどんなことに関心があるかなどいろいろな話をできたことは大変良かったです。



一日ブース運営を担った日韓スタッフが全員集まり最後に記念撮影

【日程】訪韓団

- 9月27日 ソウル着、オリエンテーション
- 9月28日 韓国外交部訪問、昌徳宮・青瓦台サランチェ、Nソウルタワー見学
- 9月29日 在韩国日本国大使館公報文化院訪問、北村韓屋村見学、学生交流(韓国外語大学)
- 10月1日 ソウル創造経済イノベーションセンター、仁寺洞見学、ホームステイ対面式
- 10月2日 ホームステイから再集合、おまつりin Seoul ブース運営参加
- 10月3日 光州ビエンナーレ見学、順天・松広寺テンプルステイ
- 10月4日 樂安邑城・生態公園・ドラマセット場見学
- 10月5日 釜山壁画村探訪、PIFF(釜山国際映画祭)の道見学、感想報告会
- 10月6日 帰国

おまつりin Tokyo 色彩豊かな高句麗衣装が人気、2日間で600人が体験

9月24、25日の二日間にわたり、東京・日比谷公園で開催されたおまつりin Tokyoでは、日韓文化交流基金ブースとして、昨年度に引き続き高麗神社、一般社団法人高麗1300の協力のもと、高句麗人古代衣装試着コーナーを設けました。おまつりin Tokyo全体では2日間で5万人（主催者発表による）の来場者がありました。24日の開催初日は大雨に見舞われましたが翌25日は天候にも恵まれ、当基金のブースには一日で500名を超す来場者がありました。

試着用の高句麗人古代衣装は赤や青、オレンジに黄色など鮮やかな色使いが特徴で、さらに女性用には髪飾り、男性用には烏の羽をあしらった帽子も用意されました。衣装を身にまとい、多くの方が日比谷公園の緑をバックに記念写真に収めて、古代からの交流の証しについて、身近に触れる機会となりました。



日韓文化交流基金ブースの全景

「日本のボランティアスタッフからエネルギーをもらいました」

建国大学校消費者情報学科4年

鄭濟赫（チョン・ジェヒョク）さん

中学生のころから、日本のゲームやドラマなどを通して日本の文化に接してきました。大学生になった今も引き続き日本に対する関心を持っていた中で、双方の国の文化を多くの人たちに伝えたいという思いから訪日団に参加しました。初日は暴雨に見舞われるなど、大変なことがありましたが、ブース運営に係わるみんなで共に乗り越えることができたので、この経験を糧にこれからも



訪れた多くの方が色彩豊かな高句麗衣装を試着しました

で、この経験を糧にこれからも困難を克服できる自信がつかしました。それから、おまつりの展示ブースで日本のボランティアスタッフと一緒に

二日間活動して感じたのは、日本人たちは「静かで礼儀正しい」と思っていたのですが、実際に一緒に過ごしてみると、印象が変わりました。意外とウィットに富んでおり、活発に交流する姿は、私たちに良いエネルギーを与えてくれました。

「高句麗衣装を着てたくさんの人たちと交流できました」

丘聖典（グ・ソンジョン）さん

高句麗衣装を身にまとい、ブースを訪れた皆さんと一緒に写真を撮ったり、話をしたりと交流できたことがとても嬉しかったです。二日目はとても暑い日で、衣装を着ていたので汗が止まらないほどでしたが、たくさんの人たちと交流ができたので、そんな暑さも忘れてしまうほどでした。おまつりでの活動を終えた今、この経験をブログなど活用して、韓国の人たちに知らせていきたいという思いが一番大きいです。また、将来日本語の通訳になることを目指しており、去る11月上旬にソウルで行われた国際的な展示会で日本語通訳を担ったところ、東京でのおまつりのブース運営の時の経験がとても役立ちました。難しいなかにある日韓関係の下でも、変わりなく韓国を愛してくれている日本人たちの姿を忘れずに、韓国において、日本文化について一生懸命伝えていきたいと思います。



ブース運営を手伝う韓国青年たちと一緒に記念撮影

【日程】 訪日団

- 9月22日 来日、浅草六区再開発地域見学
- 9月23日 【講義】「埼玉県日高市の魅力・高麗神社及び高麗郡建郡1300周年について」（講師：高麗神社 高麗文康宮司）、おまつりin Tokyo会場（日比谷公園）下見
- 9月24日、25日 おまつりin Tokyoブース運営参加、銀座・有楽町エリア地方アンテナショップを視察及び取材
- 9月26日 埼玉県の産業・特産品関連施設視察（高麗神社、サイボクハム本店、川越蔵造り町並み、秩父地域にて温泉旅館体験）
- 9月27日 埼玉県の産業・特産品関連施設視察（ぶどう農園、手打ちうどん作り、長瀨ライン下り）
- 9月28日 訪日成果・帰国後の活動計画発表会、帰国

第17回日韓文化交流基金賞 俳人・金泰定氏などに授与

第17回日韓文化交流基金賞の贈呈式が、9月29日ソウルにて行われました。今回は、日本の俳句を韓国で広めるために尽力された俳人で韓国外国語大学校名誉教授の金泰定（キム・テジョン、俳号・碧雲）氏、東亜日報論説委員で昨年同紙にて、日韓の友好善隣の歴史に関する連載を行った許文明（ホ・ムンミョン）氏の両氏と、朝鮮通信使の学術的意義のアピールに寄与されている朝鮮通信使学会の1団体に贈呈されました。

金泰定(キム・テジョン)氏
(俳号・碧雲)



韓国内で1992年にハングル世代の韓国人をメンバーとする旬会「草笛」を設立し、93年には在韓日本人との共同旬会「ソウル俳句会」の設立に参加して、韓国人俳句愛好家の裾野の拡大と日本文化理解の増進に尽力されました。2012年以降は伝統俳句協会が二年毎に開催する国際俳句シンポジウムのパネリストとして参加する等の活発な活動により、俳句を通じた日韓交流の増進に大きく貢献されました。

許文明(ホ・ムンミョン)氏



昨年、東亜日報にて「国交50年、交流2000年日韓新しい隣人を目指して」と題する特集シリーズを企画、約半年間で全43回にわたる連載を掲載しました。本シリーズでは日韓の友好善隣の歴史に光を当てるべく、両国関係に縁の深い歴史現場を取材・報道し、日韓関係の修復と未来に向けての新しい出発を韓国人、韓国社会に強くアピール、日韓関係の修復に向けた韓国世論の醸成に大きく寄与されました。

朝鮮通信使学会

会長:姜大敏 慶星大学校人文文化学部教授(写真左)
総務理事:韓泰文 釜山大学校史学科教授(写真右)



設立以来、「朝鮮通信使縁地連絡協議会」など日本側の関連団体と密接な関係を維持しつつ、資料の発掘など関連分野の研究の深化や、日韓研究者間の交流に貢献されています。毎年国際学術シンポジウムの開催や学術誌「朝鮮通信使研究」の刊行の他、会員が一般人を対象とするイベントなど朝鮮通信使の学術的意義をアピールする活動を続けており、韓国社会における朝鮮通信使への関心の向上に大きな役割を果たしてきました。

日韓交流関係者100名が集い、両国交流の持続・発展させることを確認

基金賞贈呈式の後、同会場にて教員訪日団参加者をはじめとする日韓交流関係者およそ100名が一堂に集い、韓国国内における人的ネットワーク構築とフォローアップを目的としたレセプション「明日へ向かって」が開催されました。今年度の韓国教員訪日団に団員として参加した教員たちからは、訪日時に感じた日本の学校の印象について韓国の学校に戻ってから生徒たちに授業で話をしたことや、ホストファミリーが韓国を訪れた際、ソウルの街を案内したりと帰国後も交流が続いている様子など、訪日団にまつわる話も聞くことができました。

また、光州から参加した大学教授は「ぜひこういった機会を活用して、地方でも日本研究者が交流関係者のネットワーク作りに協力していきたい」と意気込みを述べていました。



基金賞贈呈式で挨拶をされる金泰定氏



レセプションでの教員訪日団参加者。長嶺駐韓国大使(中央)、小野理事長(左端)と共に

第32回日韓文化交流基金代表訪韓団による韓国訪問を実施

当基金鮫島会長をはじめ、理事、評議員で構成される代表訪韓団が、9月28日から10月1日の4日間の日程で韓国を訪問しました。

今回の訪問では、初日に韓国外交部の尹炳世（ユン・ビョンセ）長官への表敬訪問が行われました。尹長官からは、これまで当基金が行ってきた日韓両国間の青少年交流、学術文化交流について謝意が述べられ、特に青少年交流事業の重要性や効果については自らの体験をふまえて確信していると語られました。また公共外交の観点から、東京やソウルといった大都市のみならず、地方への訪問機会を増やすことで、さらに両国関係の理解増進が深まることへの期待も伝えられました。

その他、青少年交流事業のカウンターパートである国立国際教育院の新庁舎（京畿道城南市）を訪れ、同院の金光豪（キム・グァンホ）院長と青少年交流事業に関する意見交換や施設内の見学をしました。

日程後半には、全羅북도全州市を訪問し、同地域の訪日フェロシップ経験者や国交正常化50周年記念で実施された青少年交流公募事業に参加した中高生や大学生たちとの懇談を行いました。



訪日フェロシップ経験者との懇談では、最近の研究動向について話を聞きました。



尹炳世外交部長官と握手を交わす鮫島会長



青少年交流公募事業に参加した全北大の学生からは、交流事業での経験を機に、今後は研究の道に進むことに決めた学生の話など、事業の成果についても直接知ることができました。



国立国際教育院新庁舎内の施設見学で説明を聞く一行



福島の青少年たちとの交流を目的に、現地を訪れた中高生たちからは、福島のごことが大好きになり、交流を続けている様子などを聞くことができました。

メディアアートに関する断想

多摩美術大学 JSPS 外国人特別研究員

馬 定延

フェロー研究紹介のページでは、各分野の日本研究、韓国研究をされている若手研究者による様々な見解や研究成果をご紹介します。今号では、2015年度に訪日フェローとして研究された馬定延氏の研究内容についてご紹介します。

人類は小さな球の上で

眠り起きそして働き

ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で

何をしてるか 僕は知らない

(或はネリリシキルルシハララしているか)

しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする

それはまったくたしかなことだ

谷川俊太郎『二十億光年の孤独』（昭和27年）より

今年、ソウル市立美術館で開かれた、SeMA ビエンナーレ・メディアシティ・ソウル 2016 という展覧会のタイトルは「NERIRI KIRURU HARARA」でした。谷川さんの許諾下で借りてきたこのタイトルについて、芸術監督のペク・ジスクさんは、高度成長と民主化時代を経てきたソウルという大都市が近代化の副作用で露わになった退行の兆候の前で逡巡しながらはじめて未来時制で考える美術言語の総称だと説明しています。観客のなかには、隣国の詩人が想像した、地球上のどの言語にも翻訳不可能な火星語が非常に面白いと思う人もいれば、意味がわからないと不満をいう人もいるそうです。このような反応は、展覧会のタイトルだけでなく、そのなかで紹介されたメディアアート作品に対しても同様でした。

1. 二つの言葉

読者のなかには、「メディアアート」あるいは「メディア芸術」という言葉も、まるで火星語のようだとと思われる方がいらっしゃるかもしれません。しかし、実は日本にしかない「メディア芸術」という言葉は、2001年に制定された文化芸術振興基準法第9条に、「映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術」と規定されています。1997年からはじまった文化庁メディア芸術祭が20周年を迎えた今年の秋には、「変える力」をテーマに、歴代受賞作品を紹介する展覧会と関連イベントが開かれました。漫画、アニメーション、広告やゲームなどのエンターテインメント、そしてアートという4部門に分かれている国際公募展であるメディア芸術祭においては、ほかの国で「メディアアート」と呼ばれる作品の比重が高いのはアート部門ですが、ここ数年は部門間の越境もまたひとつの見どころになっています。他方、国内外ともに「メディアアート」に関する統一された定義は存在しません。多様な用語が混在するなか、20世紀後半以来、テクノロジーを意識的に作品の要素として取り入れた芸術表現を指し示すときに使われています。隔年で開かれる国際現代美術展であるメディアシティ・ソウルは今年で16年目となりますが、第9回目の記者会見でも「メディアアートとは何か」という質問が繰り返し出てきたそうです。逆説的ですが、この問いに対する答を探し続けることこそが、メディアシティ・ソウルという特定の展覧会だけでなく、メディアアートそのものの歴史を書いていくプロセスだと、筆者は考えています。

2. 二つの作品

もう少し具体的な例として、ここで文化庁メディア芸術祭の歴代受賞者でもあり、今年のメディアシティ・ソウルに参加した若手アーティストの作品を紹介したいと思います。

三原聡一郎さんの《空白のプロジェクト#3 コスモス》【図1】は、非定期的に美術館に出没する、生きている作品です。なぜ苔玉が置かれているだろうと思いながら通り過ぎる観客もいれば、時々、動いたり止まったりする苔玉の不思議な気配を感じて、その場に立ち止まる観客もいます。2011年3月11日の東日本大震災以後、自分の国に起きた変化について考え続けている三原さんは、音、泡、放射線、虹、苔、微生物などを素材に、テクノロジーを用いた表現の背後にあるエネルギーの問題、さらには社会システムの裏面を探求する作品を制作しています。



図1 Soichiro Mihara, Blank Project #3 Cosmos, 2016, Moss, soil, electricity, Dimensions variable, SymbioticA and Kyoto Art Center Artist in Studio Program, With the support of SeMA Biennale Mediacity Seoul 2016

「他の宇宙に移動する通路みたいですね」、平川紀道さんの作品【図2】に対するある観客の感想です。平川さんは、コンピュータに重力による天体の動きをシミュレーション（模擬実験）するプログラムを演算させていますが、その計算の結果を天体のイメージで見せる代わりに、圧倒的な色彩と音の流れを出力させています。結果的に人間が知覚する作品の表象と作品が観客に提供する体験は全く異なるものになりましたが、作品の内部にあるコンピュータの演算そのものは全く同じです。世界の原理と自然の法則を人間という存在が理解することがはたして可能だろうか、平川さんは作品を通して問いかけています。

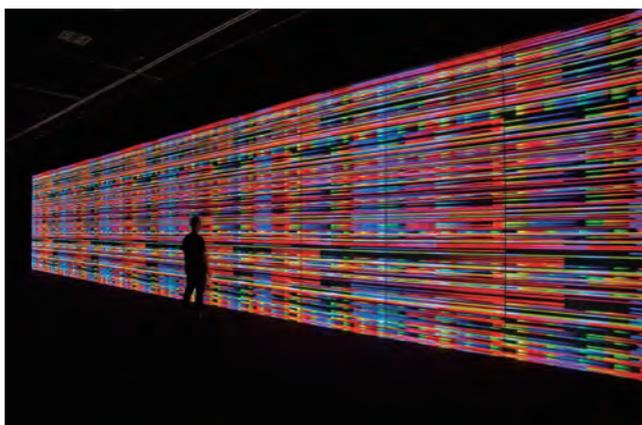


図2 Norimichi Hirakawa, the indivisible (prototype no. 1), 2015, DLP Projectors, speakers, computer, computer program, Dimensions variable

3. メディアアートという問い

東京藝術大学大学院映像研究科の博士論文をもとにした拙著『日本メディアアート史 (A Critical History of Media Art)』（アルテスパブリッシング、2014）では、言葉の射程が定まっていな「メディアアート」を、作家と作品と観客を取り囲む

環境としてのテクノロジーの発達に伴う社会現象として、またそれに対するアーティストの取り組み方の問題として捉えています。既存の美術研究の核となる個別の作家や作品ではなく、あえてその背景を成す時代像に焦点を当てる試みです。結果としてそこから見えてきたのは、アーティストたちがテクノロジーを媒介（メディア）に国、企業、大学など、美術の外縁となる社会と結んできたダイナミックな関係性の軌跡でした。筆者の意図は、メディアアートという研究対象を美術という狭い文脈から解放させ、日本の現代史という広い文脈のなかに位置付けることでした。

学部では英語英文学と心理学を専攻しつつ、音楽雑誌に文章を書いていた筆者は、修士課程では、ポケモン GOなどで知られるAR（Augmented Reality：拡張現実）技術を中心に映像工学を勉強しました。そのあと、東京藝術大学博士課程に留学してきたので、いわゆる文系、理系、芸術系という異なる分野を横断してきたといえます。三原さんと平川さんも国内外の理科学研究機関に滞在しながら研究と制作を行っていますが、メディアアートの根底には、芸術と科学技術など、異なる学問間の対話と協業を重視する価値観があります。それぞれの「言語」で世界を解明するのが学問だとすれば、他学問の言語に関する理解を通して、世界に対する認識と表現を深化させることができるでしょう。

2015年、筆者は日韓文化交流基金のフェローとして、「メディア芸術における日韓文化政策の比較研究」というテーマのもと、前述した文化庁メディア芸術祭とメディアシティ・ソウルを中心に研究を行いました。その理由は、両者が全く異なる文脈で位置付けるべき対象である、という既知の結論にたどり着くためではなく、意図的に間違った仮説を立てて、その仮説の転覆の「過程」で何がみえてくるのかを確かめるためでした。同年度、筆者が企画した、日韓シンポジウム「メディアアートのアーカイブは可能か」（2016年2月21日、日比谷図書文化館）と国際シンポジウム「メディアと芸術のあいだ：ヤシャ・ライハートの1960年代<展覧会>を読み解く」（2015年10月23・25日、国立新美術館・東京藝術大学大学院映像研究科、共同企画）に共通するのは、それらが何かの答を提示するものではなく、むしろ問いかけであり、その問いをいかにより多くの人々と共有することが可能かという問題意識です。

PROFILE

馬 定延（マ・ジョンヨン）

1980年ソウル生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科修士（映像メディア学博士）。多摩美術大学 JSPS 外国人特別研究員、国立新美術館客員研究員、韓国『月刊美術』通信員。著書『日本メディアアート史』（アルテスパブリッシング、2014）



日中韓ユース・サミット開催

8月22日から26日まで、日本で開催された日中韓外相会談に合わせて3か国の青少年30名が参加し、東京と金沢でユース・サミットが開催されました。プログラムでは3か国の共通課題である「少子高齢化」についての現状を学び、活発な議論を行い、日中韓3か国への政策提言を提出するという模擬「サミット」を実施しました。日程の最後に行われた歓迎夕食会では、学生たちから日中韓各国の政府代表者に政策提言書が手渡され、夕食会を主催した岩谷滋雄氏（前日中韓三国協力事務局事務局長）らから総評をいただきました。本号では日本と韓国からの参加者の声を紹介します。

質問事項

- ① サミットへの参加動機
- ② 今回のテーマである少子高齢化問題について、講義や関連施設の見学などを通して、新た発見したことや感じたことはありますか？
- ③ 今回の経験を、今後どのように活かしていきたいと思いませんか？
- ④ 最後に、一緒に過ごした学生たちにメッセージをおねがいします。

ハ・チェヨン（延世大学校）

- ① 日中韓が対立している分野ではなく、全世界が直面する共通の問題について3か国の青年が共に悩み、協力ができることが出来る良いチャンスだと思いました。近い国であるだけに、3か国が一番親しい友達になれると思います。互いに政治的、社会的問題で葛藤が存在しますが、自国の利益だけを求めて関係を悪化させるより、互いに協力しながら良い関係を維持していくべきだと考えています。
- ② 高齢化問題は私とかけ離れた問題ではなく、世界的に重大な問題です。この問題を克服するためには3か国が協力しなければならないと実感しました。各国の状況と環境がそれぞれ異なるため、画一的な一つの解決策を見出すことは難しいですが、各国の文化、政策、制度などに対する情報を共有するなど努力をすれば、より良い解決策を探ることができるだろうと考えます。
- ③ 真心をこめて、対話をする努力をすれば、どのような葛藤も解決できるという信念を持つようになりました。対立する状況の中で自分の立場だけを主張するより、相手の立場を考慮して配慮する心構えをすれば、今後どのような問題にも対処できるという自信を持つようになりました。また、サミットを通して親しい友達ができただけが最も大きな収穫です。先日、日本代表メンバーだった大地くんが韓国を訪問した時

には、韓国代表メンバーの大半が集まって、3日間にわたって一緒にソウルツアーをしました。3か国のいたるところに良い友達がいるということは、私がこれから日中韓と関わる仕事をしていく上でも大きく役立つだろうと信じています。

- ④ 5泊6日の短い出会いだっただけけれど、日本で、皆さんと一緒に過ごした幸せな記憶を糧に、日常を過ごしています。勉強が大変で、ちょっと辛い時もあるけど、皆さんと一緒に日中韓の連携に大きな役割を果たす日を思い描きながら一生懸命に勉強しています！再び会う日を期待しながら、一人一人忘れないでいつも応援しています。みんな会いたいです！



8/24 行善寺（石川県白山市）訪問



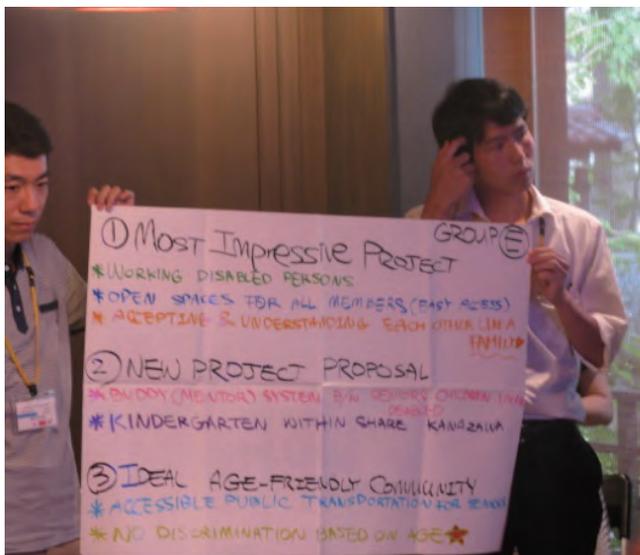
8/24 社会福祉法人佛子園 雄谷良成理事長による講義

ハン・ウィジン（高麗大学校）

- ① 似たような歴史と文化を持ちつつ、それぞれははっきりした個性を持つ日中韓の若者と互いに協力しながら異なる文化を理解し、少子化と高齢化に対する見解を共有したい、そして問題の解決策を模索する過程で、人文学的、また国際的な観点を養うことができるだろうと思い、参加することにしました。韓国、中国、そして日本は健康問題において、生活パターンから食習慣、生活文化など、多くの分野が似ているために、3か国の共同協議は問題解決へのアプローチに大きく役立つだろうと思います。
- ② 「Share金沢」と行善寺の訪問では、単純に資料を調査して

勉強すること以上の学びを得られました。「健康な高齢化 (Healthy Aging)」に向けて最も重要なのは、私たちが「老化」=「醜いこと」と考えるのではなく、自然な生物学的過程の一部であると認識することにあると思います。今回のサミット期間中に訪れた高齢者施設で、私はお年寄りの方たちが「老い」という事実は無気力になったり、落胆するのではなく、積極的に社会的共同体を作る姿を目の当たりにしました。第2の人生で新たな自分を開拓する姿が印象的でした。こうした現象を社会全体に拡張するためにはどんな制度的装置があり、大学生として私たちがやっつけられることは何だろうと考えるきっかけとなりました。

- ③ 今回のサミットは、未来の社会で予測される問題に対して、諸外国の模範となるべく重要な役割を果たすことができると考えます。日中韓の友好的な関係が、人々のより良い人生のための建設的な解決策となってほしい、という願いを政策提言書に込めました。
- ④ それぞれ異なる分野から情熱を持って集まった日中韓の代表団のみなさんに本当に多くのことを学びました。何よりもサミット期間中に共に過ごしなが、親しくなることが出来て本当に嬉しいです。最後のfarewellのパーティーで話したように、これからもそれぞれの場所で精進しながら、いい縁が長く続いていくことを願っています。みなさんありがとうございます!



8/24 多世代共存をテーマに意見交換・発表を行う

高橋亜紗美 (大阪大学)

- ① 私は幼少期をヨーロッパで過ごし、インターナショナルスクールという、多様な言語が飛び交う世界の縮図の様な環境で育ちました。その中で、世界中から集まった同世代の若者との交流や、言語や文化の学びを通して互いを理解する事の喜びを知りました。サミットへの参加も、東アジアという土

俵で新しい経験と繋がりを得たいという思いから応募しました。私は東南アジアでの国際学生会議を運営する活動をしており、その中でアジアにおける日中韓の影響力の大きさは今後のアジア経済の発展に大きく貢献するものであると感じていました。従って3か国は、教育問題や環境問題など、その発展と開発の過程で学んできた事を、他の国々に継承して行く義務があると思っています。

- ② 大学で老年学のセミナーを受講する機会があり、人類が医学の進歩により勝ち得た「長寿」が先進国においては「人口高齢化」として深刻な社会問題になっている事は大変皮肉であると思っていました。今回講義や金沢でのフィールドワークを通して、「共存する」ことへの工夫と挑戦を多く感じるとともに、私自身が普段高齢者と接する機会が全くと言って良い程無い事に気付かされました。私たちのグループが掲げた「加齢がネガティブな要素として捉えられる事のない社会」という理想は、高齢者の実態を日常として知らなければ実現しないものであると痛感するとともに「無知が故の恐怖」がそこにはあるのではないかと思います。
- ③ SNSを通して既に多くのメンバーがreunionを果たしています。こうした社会的しがらみのない学生がゆえ「同じ釜の飯を食う」経験は、かけがえのない絆を私たちにもたらしてくれました。また日中韓協力という共通の目的と関心のもとに集まった学生であるからこそ、今後それぞれの分野での活躍を目指して、互いを良い意味で刺激し合える仲でいたいです。
- ④ 私たちが日中韓ユース・サミットを通して出会った経験は、それぞれの国の将来にとってかけがえのない事であるのは勿論ですが、ひとりの友人として今後も続く信頼をもたらせてくれた皆に改めて心から感謝の気持ちを述べたいと思います。将来進む道は異なるかもしれませんが、また3か国のどこかで会えることをとても楽しみにしています!



5日間を共に過ごした日中韓のメンバーで

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2016年度第2四半期（2016年7月1日から9月30日まで）の実施事業を紹介します。

青少年交流事業

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生 (第1団)	朴信映 (パク・シンヨン) 慶熙大学校 東アジア文化研究センター	20	7	13	6/28 ~ 7/7	明治大学、龍谷大学、滋賀県大津市
韓国大学生 (第2団)	李吉鎔 (イ・ギルヨン) 中央大学校 人文大学 アジア文化学部教授	20	10	10	6/28 ~ 7/7	国土館大学、立命館大学、 滋賀県東近江市
韓国青年 (大学生) (第1団)	朴錫強 (パク・ソクカン) 全南大学校 経商学部 教授	36	9	27	7/12 ~ 7/21	青山学院大学、長野県飯田市
韓国青年 (大学生) (第2団)	朴承柱 (パク・スンジュ) 嶺南大学校 日語日文学科 講師	36	15	21	7/12 ~ 7/21	神田外語大学、長野県下伊那郡阿南町
韓国青年 (高校生) (第3団)	李丙禮 (イ・ビョンネ) 天安 カオン中学校 校長	36	11	25	7/26 ~ 8/4	神田女学園中学校高等学校、北海道旭 川東高等学校、北海道上川郡東川町
韓国青年 (高校生) (第4団)	金興榮 (キム・フンヨン) 恩平メディテック高等学校 日本語教師	36	11	25	7/28 ~ 8/4	神奈川県立鶴見総合高等学校、北海道 旭川東高等学校、北海道上川郡愛別町
韓国大学生 (外務省招へい)	宋閔周 (ソン・ユンジュ) 韓国外交部 外務行政官	30	12	18	9/20 ~ 9/29	文教大学、和歌山県日高郡
韓国青年 (おまつり) (第5団)	辛權始 (シン・グンヨン) 高麗大学校 歴史教育科 講師	15	4	11	9/22 ~ 9/28	埼玉県日高市、秩父市



大学生訪日団第1団 浴衣を着て祇園散策



大学生訪日団第2団 国土館大学訪問での生け花体験



青年訪日団第1,2団 立山で自然を満喫



青年訪日団第1,2団 長野県飯田市での特産ブルーベリー狩り体験



青年訪日団第3団 大雪山旭岳の源水を試飲



青年訪日団第3団 ホームステイでミニトマトの選別体験



大学生訪日団(外務省招へい) 和太鼓体験



青年訪日団第5団 サイボクハムでブランド豚肉の地産地消ランチを食す

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本教員 (第1団)	清水 信貴 岐阜県立岐阜農林高等学校 教諭	19	8	11	9/20 ~ 9/29	ソウル新東初等学校、城沙中学校、鐘路産業情報学校、ソウル神学大学校、延世大学校
日本高校生等	真子 哲 佐賀県立鳥栖高等学校 校長 清水 敏彦 徳島県立城ノ内中学校 校長	100	30	70	9/25 ~ 10/1	ソウル市内(景福宮、明洞・仁寺洞ほか)、京畿道(安養市、水原市、坡州市、龍仁市ほかノ学校訪問含む)、忠清南道(扶余郡)、全羅北道(全州市)、全羅南道(木浦市)



日本教員訪韓団第1団 鐘路産業情報学校で日本語通訳科学生たちと授業交流



日本高校生等訪韓団(佐賀県高校生) テコンドー体験



日本高校生等訪韓団 学校交流

沙也可をきっかけに日韓交流

大邱地域の日韓交流関係者と同地域の高校生の計 20 名(団長 金相保(キム・サンボ)氏、平成 28 年度外務大臣表彰受賞者)が、10 月 24 日から 30 日までの 7 日間の日程で来日しました。

一行は、16 世紀に日本から渡った沙也可が住んでいた場所として、日韓両国にゆかりのある大邱市達城郡地域の交流関係者のほか、同地域の高校で日本文化に関心のある高校生で構成されており、7 日間の日程中、都内の他、和歌山、熊本、佐賀の各地域を訪問しました。和歌山県では、紀州東照宮内の沙也可顕彰碑を視察した他、同地の梅加工品の製造を担っている中野 BC 社を訪問し、地域産品を活用した地場産業の事例について見学しました。その後、熊本県では、4 月の熊本地震にて被災した熊本城を見学し、熊本県庁では地震からの復興状況についての説明を受けました。日程の最後には、佐賀県の名護屋城博物館を訪れ、日韓の歴史についても触れる日程となりました。



佐賀県立名護屋城博物館で日韓交流の歴史について学ぶ一行

新任のご挨拶

日韓文化交流基金 業務執行理事

春木育美

このたび日韓文化交流基金(以下、基金)業務執行理事を務めさせていただくことになりました。私と基金との縁は深く、大学時代に基金の「大学生訪韓団」の一員として訪韓し、同じく基金が助成している「日韓学生会議」のメンバーとして、日韓学生交流に情熱を傾けました。大学卒業後すぐに韓国の大学院に進学したのも、基金が与えてくれた韓国との出会いが契機となりました。

帰国後、村山談話に基づく「日韓平和友好交流計画事業」の開始とともに、今度は基金の職員として「日韓共同研究フォーラム」および「韓国学術図書翻訳出版事業」に携わりました。その後は大学で教鞭をとるようになりましたが、その間、基金が事務局となって推進した「日韓歴史共同研究委員会」近現代史分科会の研究委員として参加するなど、その時代ごとに基金が展開してきた事業に実際に携わる中で、その意義深さや重要性、効果について、内と外から強く実感してきました。

基金は、1983 年の設立以降、これまで 33 年間にわたり、教員および青少年の訪韓団や訪日団の派遣と招聘、人物交流への助成事業、各種の学術会議や文化事業の推進、研究者へのフェロシップなど、多方面から日韓交流のための事業を誠実に推進してきました。こうした持続的かつ着実な事業推進が可能なのも、基金の各種事業に対し、深いご理解と多大なお力添えをしてくださる関係者の皆様のおかげです。あらためまして、これまでのご支援に心より感謝申し上げます。

今後、公益法人たる基金に何が期待され、また何が必要とされているのかについて、日韓交流の原点を見つめ直し、日韓の相互理解のため、未来に向けたくさんの希望の種をまき、大切に育んでいきたいと思えます。また過去と未来をつなぐため、韓国人の心を知り、日本人の心を伝える努力を重ね、次世代につなげることを目標に、尽力してまいります。

倍旧のご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



表紙写真紹介

作品写真タイトル：「韓屋の瓦堀」(撮影：小野正昭)

全州韓屋村には、韓国伝統様式の建物が数多く建ち並び、建物の周囲を囲っている堀も独特な印象を与えてくれる。